

燒きついて、所謂、道徳的、宗教的の情操になつて行けば、生命は潑刺たる力を以て、自由の境地に進むことが出来るものだ。だから、くれんも感情を殺さないで、それを正しく生かすことに努力しなければならない。

青年 どうも有がたうございました。お暇いただきます。
主人 ではお休み。

〔摘 要〕

- 一、生命が自由への進展をなすには、感情の力が充分でなければ成らない。理性は、それが單なる理性である限り、無力である。それは、感情にまで燃焼する時に、はじめて眞の力を得る。知行合一とは、即ち、理性が感情にまで燃焼した境地を指すのである。而して修養とは、かくの如き感情、云ひかへると、情操を養ふの謂である。
- 二、だが、自然感情と情操とは、決して本來別々のものではない。すべてのよき情操の芽生は、自然感情の中にある。理性が感情にまで燃焼すると云ふことは、自然感情を理性の光によつて、正しく導き養ふの謂に外ならない。
- 三、自然感情の一である羞恥感、人間の内部に存する人間的ならざるものの暴露を恥づる感情である

が、自己の無價値、弱點を、單に人前だけでなく、自己自身の前に、神の前に、又理想の前に恥づるに至つて、眞に價値ある道徳的情操となる。羞恥感に克己修徳の基礎をなすものであるが、その方向を誤る時、恥づべきを恥ぢず、恥づべからざるを恥づるに至る。故に羞恥感の正しき涵養には、内省による鋭き自己批判を最も必要とする。

四、羞恥感が、人格の尊嚴を確立せんとする感情なるに對して、愛情は、自己と他人とを融合せしめ、自己の區別を撤せんとする感情である。この感情は、心理的には、自己の生命にとつて價値あるものに引きつけられる感情なるが故に、これを正しく導くためには、先づ自己の生命についての觀念を正さねばならぬ。動物的、感覺的慾望を、自己の生命の主體であると考へる時、その愛は、必然的に利己的、盲目的となる。眞に理想的なる愛は、人類我や宇宙我に眼覺めたる者によつてのみ發輝される。理想的なる愛は、他人の人格を手段とせずして目的とするものなるが故に、決して偏局することがない。性愛は一人對一人に偏局する事が道徳的であるとせられるが、それは、必然的に動物的欲求を伴ふからであつて、これとても博愛と同様に、相手の人格を目的とする清い感情を、その基調としなければならぬ。

五、敬の感情は、自己以上のものに歸依せんとする感情である。生命の本源、宇宙の最高權威、圓滿、完全等にあこがれる心のある限り、この感情は人間にとつて自然である。權威に對する敬の感情を、迷信なりとして却ける者もあるが、それは智識迷信である。生きたる眞理は、論理の示すところに在らずして、却つて情意の指すところにあることを思はねばならぬ。敬の感情なきところ、社會生活に於て中心が失はれ、精神生活に於て理想が失はれる。尙、この感情は、人間が心を虚うして万象に對し、一切が宇宙大生命の顯現なる事を味得する時、一見自己以下なりと見ゆるものに對しても、發輝される。かくの如く、自己以下なる者に對しても、敬虔の心を以て接し得るに至つて、敬の感情は眞に理想的である。

六、人間は、羞恥、愛、敬の三つの感情を三邊とした三角形の如きもので、三邊の成長は、やがて人間と

しての偉大さの成長である。もし三邊が、たゞ一つの心境に統一されて、大いなる圓を描くに至れば、その偉大さは眞に理想的である。鋭角なる畸人を天才と思ひ誤つては成らない。人間の眞の道は、地に對する徳、人に對する徳、天に對する徳、即、上述の三感情の無礙の統一によつて達成せられる。而してかくの如き道の體現者にして、はじめて眞に天才の名に値し、偉人の名に値する。

第七夜 生活態度を語る

一、生存と所有と表現

主人 話を始めてから、もう幾晩になるかね。

青年 今夜で恰度七晩です。

主人 もうそんなになるかね。では、人間の本質についての話は、一應これで切りあげて、今夜は生活態度と云つたやうな話に移るかね。無論これまでの話だつて、生活態度の話でないことは無かつた。だが、今夜は、自我がどうの、理性がどうの、感情がどうの、と云つたやうな心理的な見方からでなく、實際生活に於て、何を目あてにして生きて行けばいいか、つまり、吾々の意志決定の大眼目と云つたやうなものを、探し當て、見たいと思ふんだ。

青年 結構ですね。實は、僕達にとつては、それが一番大切なんです。

主人 と云つても、昨夜まで話したやうな、人間に關する基礎的な理解が無くては、實際生活の目あては決められないんだ。

青年 それは無論さうでせう。

主人 そこで、生活と云ふ言葉の意味だが、人間は先づ食はなければならぬ。「食ふ」といふことは、生活と云ふ言葉から、どうしても切り離せない問題だね。

青年 云ふ迄もありません。そしてそれが僕達のさしあたつての最も痛切な問題なんです。

主人 ところで、その問題は、詮じつめると、個々の人の心の持ちかたと、社會乃至經濟組織の如何によつて、解決されることだね。

青年 さうです。だから、その經濟組織を何とかしなければ成らんと云ふのが、今日の青年の頭にこびりついて居る問題なんです。

主人 無理もないことだ。いづれはさうした方面の事も、お互に篤と考へて見なければ成るまい。だが、それよりも先づ、個々の人の心の持ちかたの方から、考へて見る必要はないかね。つまり、吾々の日常の生活態度と云つたやうなものを。

青年 それは考へて見なくても、大抵解つて居るんです。

主人 さうかな。どう解つて居るんだい。

青年 結局は、勤儉力行とか、自主獨立とか、自力更生とか、云ふことに落ちつくでせう。

主人 もうそんな事は聞き飽いた、と云ふのかね。

青年 解り切つたお題目だけを並べて、かんじんの經濟組織の方を放つたらかされたのでは、何時になつても、満足に食へる氣づかひは無いと思ひます。

主人 それはさうだ。だが君は、お題目の意味がよく解つて居るかね。

青年 読んで字の如くぢやありませんか。

主人 文字通り實行もして居る、と云ふんだね。

青年 無論です。怠けてなんか居られやしません。それこそ、明日にも食へなく成りますから。

主人 さうか。君のことだから、無論怠けては居ないだらう。だが、その勤儉力行を、案外、蜘蛛や蟻見たいな心持でやつて居るんじゃないか、と心配するね。

青年 それはどう云ふ意味なんです。

主人 蜘蛛と云ふ奴は、雨にも風にもめげないで、偉い努力をやつて、巧みに巢を張るね。だが、一通り自分の安住の場所を得ると、それからあとは、その真中にちつと蹲んで、偶然に飛び込

んで来る昆虫を捕へて生きて居る。これを偶然を食つて生きると云ふんだ。君の勤儉力行の奥のどこかに、そんな氣持が巢喰つて居やしないかね。

青年 安樂を目あての勤儉力行をやつて居るんだ、と仰しやるんですか。

主人 こないだ、人間苦の話をした時の口振から推すと、さうでは無いかと思ふが、どうだね。

青年 なるほど、さう云はれると、まだ、何處かに、さうした氣持が残つて居るやうな氣もします。

主人 幾分でもそんな氣持が残つて居ると、君の勤儉力行も、まだ本物では無いね。第一、そんな氣持の人があまりに多過ぎるから、經濟組織がうまく行かないんだ。結局、社會は個人の集團だからね。

青年 なるほど。

主人 それから、蟻といふ奴の勤儉力行も、あまり感心出来ないんだ。

青年 蟻は、蜘蛛とは随分ちがつて居るではありませんか。

主人 そりやちがつて居る。蟻は怠けることを知らない奴でね。だが蟻の勤勉は、私に云はせると、不淨な勤勉だ。

青年 不淨な勤勉ですつて？

主人 さうぢやないか。ビスケットの屑や煎餅のかけらはいゝとじて、蜻蛉の死骸やら、蚯蚓の切れ端やら、甚しきは便所の中の蛆虫まで、自分達の倉庫に引きすり込むんだからね。

青年 でも蟻にとつては、それが立派な食糧になるんですから、いゝぢやありませんか。

主人 そりや蟻自身にとつては、それでいゝさ。だが蟻は譬へなんだ。もし人間の勤儉力行が、蟻見たいに、無選擇な掻き集め主義になつたらどうだらう、と云ふんだ。

青年 それは無論いけませんね。

主人 ところで、今日の勤儉力行と云ふ奴が、とかくさうした傾向を持つて居るので困る。その氣持が直らない限り、どんなに組織を改めたところで、人間が全部安全に食つて行く事はむづかしいよ。物の所有が人生の目的である限り、結局人生は奪ひ合ひだからね。

青年 すると、どう云ふ心持で居れば、本當の勤儉力行になるんでせう。

主人 蜜蜂の生活を學ぶんだね。蜜蜂は、物を集めるにしても、美しい花園の中から、香氣の高い、清らかな蜜だけを集める。しかも、その集めた蜜をそのまま貯へると云ふのではなく、それに自分の生命の力をそゝぎ込んで、新しい蜂蜜と云ふものを創造するんだ。勤儉力行も、こ

の創造と云ふ事を目標にするやうになつて、はじめて本當の勤儉力行と云へる。そして、萬人が眞にそこに目を覺まして、努力奮闘するやうになれば、社會組織なんか少々悪くても、食ふことを心配するやうな事は、先づ無く成るんだ。食へるとか、食へないと云つて騒いで居るのは、皆んなが所有の生活に停滞して居るからなんだ。

青年 なるほど。しかし、現在食ふに困つてゐる人間は、そんなのん氣なことでは、承知出来ませんね。

主人 それはさうだ。だから、組織も適當に改めなくては成らんさ。だが、永遠のことを考へると、心の改造がもつと根本的なんだ。組織を作るものは、要するに人間の精神だからね。

青年 でも、反對に、組織が人間の心を作る、とも云へるでせう。

主人 それは云へる。しかし、組織にのみたよるやうな人間では、結局、又その組織のために窒息することになるんだ。度々云つた通り、生命の價値は、その自由な流動にある。精神は常に自主的、創造的でなくては成らない。さうあつてこそ、組織も立派なものが出来、そして生命と共に、絶えず更新することが出来るんだ。

青年 なるほど。

主人 そこで、話が又理屈つぽくなつて來るが、もう少々その事について話して見よう。一體、人間の活動をそのねらひ所によつて分けて見ると、大凡三つの段階があるやうに思ふ。その第一は「生き永らへること」、その第二は「所有すること」、その第三は「表現すること」、なんだ。無論、この三つはお互に入り組んで居て、嚴密な意味では、區別は出来ない。だが、生き永らへるために、所有したり、表現したりする人間と、所有するために、生き永らへて表現する人間と、表現するために、所有し、生き永らへる人間とは、全然その生活態度がちがつて居る。

青年 つまり、蜘蛛と、蟻と、蜜蜂との違ひなんですね。

主人 さうだ。で、目標を生き永らへることに置いて居る活動は、それが如何ほど複雑なものであつても、要するに、動物や植物と共通な、自然生活以上の何物でもない。その人間にとつては、たゞ生き永らへることだけが價値であり、従つて、自分の生存のために行ふすべての行爲は善だ、と云ふことになる。そこには、本當の意味での精神の自由もなければ、道徳も無い。たゞ彼を支配する最後のものは、必然の法則だけなんだ。

青年 成るほど、さうなると、人間も脳髓を持つた機械に過ぎませんね。

主人 うむ、仲々うまいことを云ふね。そこで第二の所有を目標にする生活だが……

青年 先生、所有を目標にする生活なんてものがありませうか。元來所有は生存の手段なんですから、生存よりも所有を重く見るやうな生活は、理屈の上からは、あり得べからざる事ですし、又、實際誰だつて、生き永らへる必要があればこそ、所有したいと思ふのです。

主人 理屈はさうだ。だが、人間は折々目的と手段とを取りちがへて、平氣で居るものなんだ。青年 それは、さう云ふことも無いとは限りませんが……

主人 限りませんが、どころぢやない。新聞の三面を、少し注意して見て居ると、そんな例はさうらに出て来るよ。ことに財物の所有は享樂と大いに關係があるので、餘計に眼が眩むのだ。許されて生きると云つたやうな、つましい心持で生存を欲して居る間は、大丈夫なんだが、享樂の妖にかゝると、財物の所有のみが一切を解決するやうな氣がして、まつしぐらに、所有へ所有へと突進して行きたくなるものだ。

青年 なるほど。

主人 さうした生活の正しいものでないことは、更めて云ふまでもないだらう。試みに、獲得と所有とに夢中になつて居る人に尋ねて見るが、貴方は何のために働いて居らつしやるか。」「つて。するとその人は、恐らく得意になつて答へるだらう。」「仕事をするのが面白いんだ。』と。

だが、その仕事と云ふのが、何を意味して居るかは、その儲けた金を、文化事業にでも寄附するやうに勧誘して見ると、わけもなく明瞭になるだらう。そこで、それとなく話頭を轉じて、
「そんなに金を儲けてどうなさるんですか。』と尋ねて見る。するとその人は、
「君、金がなくて飯が食へるかい。』と、やゝ怒氣を含んで、答へるだらう。そしたら、すかさず、
「何のために御飯をめし上げるんですか。』と、思ひ切つて尋ねて見るが、恐らくその人は、
「飯を食はなくて生きられるか。馬鹿！』と、呶鳴りつけるだらう。呶鳴りつけられても構はぬから、もう一度、
「貴方は何のために生きて居らつしやるか。』つて、尋ねて見るんだね。その人はすつかり怒つて仕舞つて、或は答へないかも知れない。或は「わかつて居るぢやないか、仕事をするためだ。』と、本當に解つて居るつもりで、答へるかも知れない。もしさう答へたら、出来るだけ穩かに「何のために仕事をなさるんです。』と、もう一度尋ねて見るんだ。その人の心の中には、恐らく、
金儲けの事しか浮んで來ないだらうが、屹度返事にまごつくだらう。

青年 今夜は、先生、いやに皮肉ですね。

主人 皮肉に聞えるかね。だが、所有生活に夢中になつて居る人間にとつては、働くのは金のため、金は食ふため、食ふのは生きるため、生きるのは働くため、働くのは金のため、金は……

青年 先生、もう解りました。

主人 解つたか。解つたら止さう。とにかく、同じ輪をぐる／＼廻つて、止まるところを知らない生活哲學に生きて居るのが、彼等なんだ。尤も蜘蛛見たいに、偶然を食つて生きて居るやうな生活に比べると、自主的、活動的な點に於て、多少取り柄が無いでも無い。しかし所詮は、物と肉體との關係以上の何物でも無い。そこから所謂文化と云ふものが生れるとしても、それは却て人間の眞生命を蝕み、人類を争闘に導く原因になるに過ぎないんだ。

青年 なるほど、さう仰しやると、今日文明の利器だと云はれて居る機械の多くは、却て人間の自由を束縛し、精神を蝕んで居るやうですね。

主人 すべてが所有欲のためにだけ、利用されるからだ。發明者の心は、必ずしもさうではなかつたらうと思ふがね。

青年 すると、發明や發見も考へるものですね。

主人 すべての人が、發明者や發見者の尊い心持に成れば、問題はない。

青年 と、申しますと？

主人 つまり、生活の目標を、單なる生存や、生存のための物の獲得所有に置かないで、自己の

生命力を表現すると云ふことに置くだね。表現はやがて創造であり、創造はとりも直さず奉仕なんだ。だから、表現を自あての生活は、奪ふ生活でなくて、與へる生活なんだ。みんなが與へる。そして、與へるために必要なものだけを、他から與へて貰ふ。さう成つて、はじめて社會組織も經濟組織も、完全なものが出来上る。要するに、個々の人の生活態度が、すべての基礎なんだ。

青年 しかし、そこまで行くには、前途遼遠ですね。

主人 前途遼遠でも仕方がない。急ぐと碌なもの出来ないよ。慾得づくで作つた組織なら、また慾得づくですぐ破れるんだからね。で、破れない組織を作るためには、どうしても物と人との關係をはつきりさして、ゆつくりと、根本的に人間の生活態度を正す必要がある。

青年 物と人との關係と云ひますと？

二、人主物従

主人 それは、理屈の上からは、別にむづかしいことではない。簡単に云へば人主物従、つまり、人が物のために働くのでなく、物を人のために働かせると云ふ、極めて平凡なことなん

だ。

青年 その位のことなら、誰だつて解つてゐるでせう。

主人 解つて居る？ 成るほど解つて居るつもりかも知れん。だが、人主物従を生活の上に眞に實現して居る人は、さうざらにあるものではない。

青年 そんなに難かしい事なんでせうか。何でもないことのやうに思ひますが。

主人 理屈はやさしいが、實現はなかなか難かしい。その實現が出来さへすれば、それだけで、世の中は大體うまく行くんだが、うまく行かないのは、要するに、人主物従が徹底して居ないからなんだ。解つて居るつもりで居る君だつて、實はどうかと思ふね。

青年 自分では大丈夫だ、と思つて居ますが……。

主人 物に使はれないで、物を使つて居る、と云ふ確信が本當にあるかね。

青年 あるつもりです。

主人 あれば結構だ。ところで君は、カーネギーの工場に働いて居た或る職工の話を、聞いたことがあるかね。

青年 どんな話でせう。

主人 何でも、素晴らしい腕前を持つた職工だつたらしい。その職工が居たために、その工場の製作品が、世界的に有名になつた、とまで云はれて居る位でね。實は何を作る工場で、何と云ふ名前の職工だつたか、忘れてしまつたが、話の肝腎な點だけは覚えて居る。……ところで君、カーネギーの名は聞いたことがあるだらう。

青年 え、亞米利加で有名な實業家だつたんでせう。非常に正しい、人道的な……。

主人 さうだ、流石はカーネギーで、早くからこの職工に眼をかけて居た。そして其の職工が相當の老齡に達すると、ある日自分の室に其の職工を呼んで、「君も随分永い間私の工場のために働いて呉れて、お蔭で工場もこの通り立派なものになつたが、私の君に對する責務は、まだ充分果されて居ない。實は、今日今からそれを果さうと思つてゐる。」と云つて、一枚の厚い紙片をその職工に差出した。職工は不思議に思つて、それを開いて見ると、それは重役任命の辭令だつたさうだ。どうだい君。職工は飛び上つて喜んだだらうね。

青年 それは喜んだでせう。

主人 君でも、そんな風に待遇されたら、嬉しいだらうね。

青年 それは嬉しいにきまつて居ます。

主人 ところが、その職工は、喜ぶどころか、非常に落膽したさうだ。

青年 どうしたと云ふんでせう。

主人 この職工には、物と人との關係が、本當の意味で解つて居たんだね。

青年 と申しますと？

主人 それは、この職工が、その時、カーネギーに對して云つた言葉を聞けば、よく解る。彼はかう云つて居るんだ。「私は人間らしい生き方をしたいと思ひます。私は物や、物の奴隷に成りたくはありません。そして、私が職工として勤めさせて戴く限りは、私は人です。死ぬまで人であることが出来ます。と云ふのは、私は職工として働いてこそ、私の生命を、自由に、悦びに充ちて使用することが出来、同時に、人生に役立つことが出来ると思ふからです。しかし、もし私が重役にならなければ成らないとしますと、私は今日から物です。少くとも物の奴隷です。私は重役としては、經驗もなく、無論自信もありません。私は無爲にして暮すより外に、方法が無くなります。私は生命の自由と悦びとを失ひ、しかも人生に何の貢獻もせず、今日から暮らさねば成らないでせうか。社長さん、お願ひです。もしこの辭令をお返しすることが、工場のために、又亞米利加と世界とのために、非常な害悪でなければ、どうか私の生命のため

(200)

に、これをお返しすることをお許し下さい。」と云つて、彼はカーネギーの前に跪づいたさうだ。

青年 へえ……感心ですね。

主人 流石のカーネギーも、これにはすっかり頭が上らなかつたらしい。そして、其の職工の手を執つて、叫んで云ふには、「許して呉れ、許して呉れ。私の人生に對する今日までの考へは、すつかり間違つて居た。私は、人と物とを取りちがへないつもりで、實は取りちがへて居たんだ。私が物の奴隷であつたればこそ、君までも物の奴隷に陥れようとした。だが、悪意は無かつたんだ。たゞ君をそれほど立派な人と知らず、また、私自身、これほど無智な人間と自覺しなかつたために、起つた間違なんだ。君の職工としてのこれまでの立派な働きが、何處から力を引き出して居たかも、今はよくわかつた。どうか今後もその精神で、快よく工場に働いて呉れ。」と云つて、カーネギーは、秘書を呼んで、即座に辭令を書き代へさせた。新しい辭令には、單に職工の俸給だけが記されて居たが、それは大統領と同一の俸給だつたさうだ。

青年 へえ、偉い人間が集まると、僕達の想像もつかないことをやるものですね。

主人 善い事やつてのける自由さは、まるで天馬空を行くが如しだね。だが俸給のすばらしさ

(201)

に呆氣にとられて、物と人との関係を忘れてしまつてはいけないよ。

青年 いや實際、僕もカーネギーと同様に、これまで物と人との関係が、本當には解つて居ませんでした。

主人 とうとう白状したかね。だが、「カーネギーと同様に」は、振つて居るね。

青年 恐れ入ります。

主人 そこで、一つ君にいゝ言葉を紹介しよう。それは「仁者は財を以て身を發し、不仁者は身を以て財を發す。」と云ふんだ。これは儒教の經典たる「大學」の中にある文句だが、意味は解るだらう。

青年「財を以て身を發す。」と云ふのは、人主物従、「身を以て財を發す。」といふのは、その反對でせう。

主人 さうだ。つまり、人格の自由な活動と向上とのために、物を使用するのが仁者で、それを逆に行くのが不仁者、と云ふわけなんだ。それについて、一つ面白い話がある。それは、ある禪僧の話なんだが、或る人が、その坊さんを困らしてやらうと思つて、自分の家に招いて鯉の料理を出した。そして、どうするかと思つて見て居ると、その禪僧、一向平氣で、刺身だらう

と、吸物だらうと、さつさと平げてしまふ。そこで主人が、「この頃は、御出家も随分文明にお成りになつて、私共も氣が置けなくなりました。」と皮肉つて見た。すると、その禪僧は、「鯉も拙僧の腹中に入つて、見事に成佛したことで御座らう。」と答へたさうだ。

青年 ひどい坊さんですね。

主人 ひどい坊さんと云へば、ひどい坊さんだが、考へやうでは、物事に捉はれない禪僧の一面を物語る話として、一寸面白いぢやないか。ことに、鯉を成佛させる、と云ふ考へがいゝね。吾々は、いつも、物を成佛させると云ふ考で居なくては成らない。成佛させるとは、殺すことでなくて、宇宙人生の進展に奉仕させる事なんだ。即ち徹底して生かすことなんだ。一切を成佛させ、そして人間自ら成佛する。これが人間の仕事なんだ。この點がはつきりして居れば、みだりに天物を暴殄するのも悪いし、かと云つて、ただく物の前に跪ぐのも悪い、と云ふことがわかるだらう。

青年 つまり、人間は、その生命力の表現によつて、宇宙人生の完成のために奉仕する、そしてそのためには、一切の物を人間のために生かして使はなければならぬ。と、かう仰しやるんですね。

主人 さうだ。

青年 わかりました。ですが、そうした考へ方には、随分人間本位な我儘が、這入つて居るんではありませんか。

主人 君は米を食つたり、病菌を殺したりすることを、君の良心に恥ぢるかね。

青年 そんな事はありませんが……。

主人 では、問題はないぢやないか。その事は、すでに「宇宙力」の話の時にも云つた通りで、結局人間は、人間の最高と信ずる道を進むより外にないんだ。「完全」への誠を以つて進んで居る道なら、それでいゝだらう。人間が、その正しいと信ずる目的のために、毒蛇を屠り、石炭を掘り、稻を刈り、魚を獲ることは、當然許さるべきだ。吾々は、良心の命令によつて動くより以上の、善い生き方を知らないから、かりに、もつと善い生き方があるとしても、それはどうにも成らない。元來良心に恥ぢない事まで、色々詮索することは、人生に何の利益もない知的遊戯だ。君だつて、そんな事を眞剣に考へて居るわけでは無からう。

青年 實は、一寸疑問が起きたものですから、つい……。

主人 人生を考へるには、議論の遊戯にならないようにしなくては成らない。……では、物と人

との関係は、大體これでいゝね。

青年 え、よくわかりました。

三、生命力の表現と職業

主人 そこで、人間の生活目標は、單なる生存でもなく、物の所有獲得でもなくて、自由なる生命力の表現であり、そして、物は常にこの目的のために奉仕すべきものである、と云ふことが解つたわけだね。

青年 わかりました。

主人 さうすると、お互の職業と云ふものも、自然その目標に合致すべきで、それは單に生活費獲得の手段でない、と云ふことが解るね。

青年 わかります。しかし、生命力の表現なんて、そんな難かしい事を自覺して、職業をやつて居る人は先づあるまい、と思ひます。

主人 ところが、考へやうでは、人間は心のどこかで、ある程度まで、皆その事が解つて居るんだ。

青年 解つて居るんですつて？

主人 さうだ。明瞭めいりやうに自覺して居ないだけで、實はよくわかつて居るんだ。何と云つたつて、それが人間としての本然の願ねがなんだからね。

青年 さうでせうか知ら。今夜は、先生はいやに人間を上げたり下げたりなさるやうですね。

主人 何も皮肉ひにくを云つて居るつもりぢやないよ。一體君は、君の力で作つたもの——米こめでも、品物でも、其他何でもいゝが——それを誰かど、質しつが悪いとか、出来がまづいとか、悪口を云つて居ると聞いたたら、どんな心持がするかね。

青年 心持よくありませんね。

主人 それは、品物の値段や、賣行きに影響えいぎやうするからかい。

青年 それもありますが、そればかりではありません。

主人 そればかりではない、と云ふのは？

青年 とにかく、一種の侮辱おじそを感じますね。

主人 君自身、その品物に自信じしんがないとしたら、恥しくも思ふだらう。

青年 無論さうです。

主人 その侮辱感おじそかんなり、羞恥感しゆうちかんなりは、物質欲ぶつしつよくとは大して関係のない、君自身の人間的生命じんぎんていせいめいがうけるところの感じではないかね。委ましく云ふと、君自身の生命の表現が、不當に評價ひやうかされたか、もしくは、その表現が實際につまらなかつた、と自覺じかくした場合に、起るところの感じではないかね。

青年 さう云はれると、さうです。

主人 そしてそれは、損得そんとくの問題以上に大切な問題ではないかね。……無論、全然人間的な良心を失つて居る人達だと、別だが。

青年 當り前の人間にんげんだつたら、先生の仰おほしやる通りでせうね。

主人 さう考へて來ると、人間は案外正直あんがいしんじきなんだ。心の奥底おくそこでは、職業の本當の意味が解つて居るんだ。たゞそれが日常生活に於て、表面に現はれて來ないので困こまる。日常生活に於ては、本當の願が押しつぶされて、第二義だいにぎ以下の願が、とかく、のさばりたがるものなんだ。人生は、その本質に於ては、決して悪いものではない。たゞその本質が、いつも、奥の方にかくれたがるのが悪いんだ。そこで吾々は何時なんじも、その第一義だいいぎ的なものを、明るみに引っぱり出す工夫くふうをしなければ成らない。それが、人間の成すべき仕事の最も大切な部分ぶぶんなんだ。それが出来る

と、あとはひとでに明るく伸びて行く。生命の創造と云ひ、生の實現と云ひ、言葉は色々あるが、要するに、人間の第一義的な願に目をさまし、その願に従つて進んで行くことなんだ。それがなければ、千の工夫も、萬の實行も、それは生命の實現でも、創造でもない。職業についての觀念の正否も、そこに基礎を置くか否かによつて、きまるんだ。

青年　すると、職業を生活費の問題と關聯させることは、間違ひでせうか。

主人　間違ひだとは云へない。いや、むしろ、生命力表現の問題と生活費の問題とを、切り離して考へることが間違ひなんだ。吾々は、眞面目に生命力の表現をやつてさへ居れば、當然活かして貰へるものだ、と確信すべきだね。人生の進展に貢献する仕事を眞剣にやつて居て、絶対に飯が食へないと云ふことは、實際に於て先づ有り得ない。多くの場合、人々は食はんがためにのみ働くから、却て食へなくなるんだ。皆んなが、食ふことを直接の目的にしないで、眞剣に自分の生命の創造と表現とをやりさへすれば、少くとも、人生に餓えると云ふことだけは無くなる、と私は思ふ。國と國、人と人が、物欲のためにお互にせめぎ合つて、却て自ら餓えて居ると云ふのが、今日の有様だ。國家は、國民の生命力表現の綜合によつて、人類文化への奉仕をやるためにのみ必要であつて、略奪と商取引のために必要であるのではない。一家の職

業だつて、それと同じだ。

青年　話はちがひますが、先生は、廢娼問題をどうお考へですか。

主人　無論廢止に賛成だ。私はあんな仕事を職業だとは認めて居ない。あれは生命の表現とは最も縁遠い、いやむしろ、物欲のために生命を殺戮して行く仕事なんだ。國家の名に於て、あれを一つの職業として認めて居ると云ふことは、人生に對する反逆だとすら思ふね。

青年　しかし、あれを廢すると、もつと害悪がひどくなる、と云ふ説もありますか……。

主人　害悪を擴げないための、一つの神聖な任務を持つて居る、とでも云ふのかね。

青年　神聖だなんて、誰も云やしません。

主人　でも、さう云ふ説の人は、宗教家や、防疫官や、さう云つた人達の仕事と、その精神に於て、あまり違はない仕事のやうに、見て居るんぢやないかね。

青年　まさか。

主人　しかし、詮じつめると、さうなるから仕方がない。それは、或は廢娼の結果、面白くない現象が起るかも知れないさ。しかし、國家の名に於て、人身賣買を正當視して居るのは、もつと恐ろしいことだ。國家が、國民と國家自身との正しい生命力の表現のためにのみ、存在して

居る限り、明瞭にそれに反する事柄を、一の職業として、その國家内に認めて居るのは、何と
しても大きな矛盾だらう。君は、さうは思はないかね。

青年 それは思ひます。しかし、それを廢すると、もつと害毒が擴がる、と云ふやうな説を聞き
ますと……。

主人 職業が生命力表現の手段であり、人生創造への奉仕である、と云ふ原則の前には、そんな
功利的な考へを容れる餘地はない。何が害悪だと云つても、生命の原則を、正面から、國家の
名に於て破るほど、大きな害悪はない筈だ。もし人肉賣買が、そんな功利的な考へから、正
業と見なされるなら、泥棒だつて、富の分配の不公平を、いくらかでも緩和する、と云ふ立
場から、正業と認めて差つかへないことになるだらう。とにかく、物欲だけを目標にした活動
は、職業と認めるわけには行かない。職業と云ふ以上、何としても、それは、生命力の表現に
よる、人生への奉仕でなくては成らない。多くの職業は、事實さう成つて居るんだ。たゞ、各
人の自覺の程度に差違があるだけだね。

青年 職業を墮落させる主なる原因が、物欲にあることは仰しやる通りですが、世間の所謂偉い
方々の中には、もう一つ、名譽欲と云ふものをその上につけ加へて、随分職業を墮落させて居

る人もあるやうに思ひますが……。

主人 君の言ふ通りだ。自己の生命力を、實人生そのものの中に表現することを忘れて、一途に
他人の認識の中に刻みつけやうとさせる、所謂名士なるものが、世の中を毒して居ることは、
實際想像以上だね。

青年 有名になることだけを、一生の仕事にして居るやうな人もありますね。

主人 ある。たしかにある。だが、お互だつて、その點では滅多に安心は出来ないぜ。一體、人
を讃めると云ふ事は悪い事ではないが、讃められる側から見ると、必ずしもそれはいい結果ば
かりは生じない。つい、「讃められたさが一杯」で、仕事をやるやうになるものでね。だから、
ほめられた場合こそ、餘程警戒する必要がある。それについて、アンデルゼンと云ふ人の書い
た即興詩人と云ふ物語の中に、面白い話がある。それは一人の少年が、毎日聖母マリアの像の
前で、真心こめてお禱りをして居た。ところが、或日一人の旅人が、そのお禱りの聲をきいて、
「あゝ美しい聲だ。」と讃めた。するとその翌日から、その少年は、自分の美しい聲を、誰か聞い
て呉れるものがありはしないと、そればかりが氣になつて、真心のこもつたお禱りが出來な
くなつてしまつた、と云ふのだ。

青年 なるほど、考へさせられる話ですね。

主人 お互、讃められて一生を棒にふるにやうに、氣をつけたいものだね。その點になると、流石は西郷南洲だ。「金も名も命も要らないやうな、始末に終へぬ人間でなくては、大事を共にするに足りない。」と云ふやうな事を彼は云つて居るが、彼自身が、たしかに評判や利害を超越した人物だつたらしい。さう云ふ人になると、どんな職業をやつて居ても、たゞ爲すべきことを爲さう、と云ふ誠があるばかりで、所謂職業意識なんか、全く超越して居るんだ。

青年 さうした心境まで進むのは、吾々凡人には出来さうもありませんね。

主人 無論、南洲そのまゝの心境を、直ちに一般の人々に期待するわけには行かない。しかし、職業が、單に財物獲得の手段でなくて、生命力の表現であり、そしてその表現は、他人の認識に刻みつけるための表現でなくて、實人生の進展のための表現である、と云ふことだけは、すべての人々に、はつきり呑みこんで貰ひたいと思ふね。理想を云へば、職業意識を超越して、たゞ爲すべき事を爲す、と云ふ誠意だけを持つて貰ひたいと思ふのだが、そこ迄行かないとしても、少くとも、はつきりと、正しい職業意識を持つて、事に當ると云ふことは、今日の時世を救ふために、極めて大切だと思ふね。

青年 それは無論大切です。しかし、さうした考になりさへすれば、それで安心して食へもし、社會の尊敬も受けられると云ふ保障がない限り、貧しい人は財物へ、豊かな人は名譽欲へと走るのは、普通人として、やむを得ないことではないでせうか。

主人 やむを得ないと云つて居れば、何時まで経つたつて、やむを得ないだらう。

青年 僕自身でも、先生の仰しやる事は、頭では解つて居ながら、何となく不安に感じますが……

主人 それは實力の問題だよ。實力がありさへすれば、そんな不安はない筈だ。

青年 實力と云ひますと？

四、職業技術の錬磨

主人 それは讀んで字の如くで、職業を遂行して行く力量、云ひかへると、職業技術だね。それが確かりさへして居れば、財物も名譽もひとりでに躓いて来る、と云ふ自信が出来るから、安心して、自己の生命力の表現を楽しむことが出来る。ところが、その力量が足りないと、やれ今の世の中は正直にして居ては通れないの、やれ、地位や名譽がないと思ふ通りの仕事が出来ないのと、色々勝手な理屈をつけて、不正な利得を狙つたり、虚名に走つたりしなければ成らな

くなる。それは恰度、不勉強な學生が、試験の時に、カンニングをやるやうなものでね。

青年 人生のカンニングと云ふ譯ですか。

主人 さうだ。力量が仕事に伴はないと、とかく不安になる。不安になると氣の小さい人間は自殺するし、横着な人間はカンニングをやる、と云ふことになるんだ。かう考へて来ると、職業技術の如何は、單に、食ふか食はぬかの問題であるばかりでなく、社會道德に重大な關係を持つことになる。

青年 なるほど。職業教育の重大視されるのは、さう云ふところにも理由があるんですね。

主人 さうだ。何と云つても、人間は一種の動物なんだから、食はなくしては何とも仕方がないが、それも人に頼つて居たんでは、何時まで経つても、不安は絶えない。やはり、自分で食ふのが一番確かだ。そこで、自分で食つて行けるだけの力量なり、自信なりを持たせるのが、職業教育の一つの重大な任務になる。無論、前にも云つた通り、職業の眞意義は、各人がその生命力を表現して、人生創造に奉仕するにあるのだから、其の點は十分はつきりさせなくては成らない。しかし、それも自分で食へるだけの力量を持たせてのことだ。所謂「恒産無き者は恒心なし」でね。

青年 先刻先生は、生活費のことなんか、大して重大でないやうな風に、仰じやいましたが……

主人 重大でない、とは云はなかつたつもりだ。たゞ、それを職業の眞意義だとするのは誤りである、と云つたまでだ。その職業の眞意義を發揮するも、しないも、自分で食へるだけの自信がなくては、どうにも成らないからね。とにかく、職業上の力量を養ふことは、いづれにしても肝要だ。

青年 その點では、今日の教育制度は、随分不完全ではないでせうか。

主人 制度も悪いが、教育を受ける方の側もよくない。あまりに學校にたより過ぎるんでね。君等もあまり學校をあてにしない方がいい。ある程度まで頭が開けたら、あとは自力で行くさ。

青年 よくさう云ふことを云はれますが、それがなか……

主人 そりや簡單には行かんさ。しかし全國の青年の中には、その點で随分偉いのが居るよ。

青年 さうでせうか。

主人 さうでせうかつて、君はちつともそんな青年達の話聞いたことはないのかい。青年團あたりで、そんな青年の事績を集めた本を、毎年出して居るやうだがね。

青年 まだ、讀んだことがありません。

主人 それはいけないね。君、むづかしい本を捨てるのはいゝ加減にして、少し、あゝ云ふ實際の體驗を書いた本を讀んで見たまへ。全くせいゝするよ。君位の煩悶なら、きつと吹き飛ばされてしまふだらう。

青年 そのうち、是非讀みたいと思ひます。

主人 そして折があつたら、さうした青年達に、直接逢つて見たまへ。生活難とか、失業とか云ふ問題は、まるで考へて居ないやうに見えるぜ。それこそ全く、自分の生命の表現を樂しんで居るやうに思へるんだ。

青年 さう云ふ人達は、相當に教育もうけて居るんでせう。

主人 中には、中等程度位は出て居る人もあるが、大抵は補習學校程度だね。いづれにしても、學校の力は大了なものではないやうだ。自主創造、これが彼等に共通な標語でね。

青年 なるほど。

主人 君も随分自力で行く方だが、さうした青年達に比べると、まだ何處やらに、制度や他人の力を當にして居るところがあるやうだね。

青年 さう云はれると、面目ありません。

主人 人の禪で角力を取らう、と云ふ根性がぬけない限り、到底本當の力量は養へないと思ふね。宮本武蔵は、「神佛を尊んで、神佛を頼まず。」と云つて居るが、その位の覺悟があつて、はじめにあれだけの力量が養へたんだ。無論、私は、教育なんかどうでもいゝ、と云ふのではない。君達のやうな青年のために、國家がもつと考へてやらなければならぬのは、云ふまでもないさ。しかし、どんなに施設が完備しても、結局は本人次第だよ。さつき云つたやうな偉い青年になると、國家の施設なんかを、ぼんやり待つては居ないんだ。自分に必要なものは、自分で工夫して行くと云つたやうな風でね。

青年 實際僕等も、もつと確かりせんといけませんね。

主人 尤も、自力でやると云つても、他人や社會の力を馬鹿にすると云ふ意味ではないよ。そこは誤解しないやうにして貰ひたい。

青年 それは無論わかつて居ます。絶對の自力なんか、有らう筈がありませんから。

主人 他人の力を取り入れるのも、やはり一つの自力だからね。蜘蛛見たやうに、自分の頭から引き出した網だけをたよりにして居るのも、考へものだ。

青年 つまり、其の取り入れかた如何が大切ですね。

主人 さうだ。たゞ漫然と他人の力に依頼して居たんでは、何時まで経つても、真に自分の力量を養ふことには成らない。それは却つて自分の力量を殺ぐやうなものだ。また、一口に職業技術と云つても、悪辣に立廻つて、他人の努力を盗みとるやうな技術もあるし、又社會事業とか社會教化とかを看板にして、うまく人の禪で角力を取るやうな技術もある。さう云ふのも、自力と云へば自力だが、それは泥棒や人身賣買業者と同様、職業の意味を根柢から誤つて居るので、全く問題にはならない。

青年 さう云ふのが、先生の所謂、蟻の生活ですね。

主人 さうだ。職業技術を養ふと云ふ點から云つても、やはり蜜蜂の生活が一番いゝやうだね。自力の網に閉ぢこもつて、獨りよがりになるのも考へものだし、それかと云つて、他人の努力の結果のみをあさり歩いて、何等自分の力を加へた創造をやらないのもいけないし、結局は、他力と自力を練りまぜる蜜蜂式の生活が、本當に自分の力を養ふことになるよ。これは、學問を職業にして居る人にも、當てはまることなんだ。怠惰で、獨斷的な理想主義者が蜘蛛、無批判で、百科全書的な經驗主義者が蟻、理想と經驗、思索と讀書とを常に織りまぜて居る人が蜜

蜂、と云ふ工合にね。

青年 なるほど、面白い譬ですね。ところで、先生、職業技術だけで、本當に安心が出来るものでせうか。世の中は、さうばかりも行かないやうに思ひますが。

主人 本當に身についた力量があれば、決して不安なことはないと思ふがね。

五、運命及社會の威力に對する態度

青年 でも、人間には運命と云ふものがあり、また、社會の何かの缺陷のために、随分無茶な壓迫を蒙つて、立派な力量はありながら、身動きも出来ない、と云ふやうな場合も、實際にはありますからな。

主人 なるほど、それはたしかにある。

青年 むしろ人間の不幸は、運命のいたづらか、社會の缺陷かによることが多いではありませんか。

主人 考へやうでは、さうも思へる。だが、一體運命とは何かね。

青年 人間の力では、どうにも成らないのが運命でせう。

中人 そんな力を持った神様でも何處かに居る、と云ふかね。

青年 それはどうだか知りませんが、とにかく、人間業では、どうにも成らない場合があると思ひます。

主人 人間業で動けば、それは運命とは云へないね。

青年 無論です。

主人 さうすると、運命と云ふものは變なものぢやないか。

青年 變なもの、と云ひますと？

主人 つまり、人間の力では動かないものであるが、同時に動くものでもある、と云ふことにもなる。

青年 先生の仰しやることは、さつぱり解りませぬね。

主人 君は、人力の及ばない範圍が運命だ、と云ふんだらう。

青年 さうです。

主人 すると、人力が及べば、運命は退却するわけだね。

青年 はあ……。

主人 解らんかね。では、君に尋ねるが、甲乙二人の漁夫が居て、甲は漁に出たために、暴風にあつて難破し、乙は何かの用で出なかつたために、難を脱れたとする。この場合、甲は運がわるくて、乙は運が善かつた、と云ふわけになるね。

青年 さうです。

主人 ところで、もし乙が、暴風のあるのを豫知して出なかつたとすると、どうなるかね。やはり運がよかつた、悪かつたで、片づけてもいゝものかね。

青年 その場合は運とは云へないでせう。

主人 なぜ。

青年 それは、人間の知力で、その難を免れることが出来るからです。

主人 つまりその場合は、運命の差でなくて、漁夫としての力量の差だね。

青年 さうです。

主人 さて、さうなると、同一の事柄が、運命と呼ばれる時もあれば、さうでない時もある、と云ふわけだね。

青年 なるほど解りました。運命と云ふものは絶対的のものではありませんね。

主人 さうだ。運命は暗のやうなものなんだ。光が届きさへすれば、暗は無くなる。それと同様に、人力が強くなれば、運命と云ふものも、全く無くなるかも知れない。要するに、人間の力量次第だよ。また、社會の缺陷から来る不幸にしても同じことで、力量次第では、不幸が不幸でなくなるんだ。むしろあべこべに、社會の缺陷なんか無くすることが出来ると思ふね。

青年 個人の力量はどんなに立派でも、組織が悪いと、一概にさうばかりも行かない、と思ひますか……。

主人 一應尤もだ。しかし、元來社會は個人が集つて作つたものなんだから、その組織の善悪も結局は個人の力量によつて決まることだ。だから、組織の悪いことばかり云つて居ないで、みんなが、もつと力量を養ふことだね。大體、運命悲劇とか、社會悲劇とか云つても、詮じつめると、人間の力量の不足から生じた、所謂性格悲劇なんだ。

青年 なるほど。

主人 だから、やはり力量第一主義で、ぐいぐい押して行くに限るよ。

六、公事能力の涵養

青年 力量の大切なことはよく解りました。しかし、そこいらになると、力量と云つても、それは單なる職業技術だけではありませんね。

主人 それはさうだ。職業が生命力の表現であり、人生創造への奉仕である、と云ふ自覺を以て行はれる限り、そこには、自然にある程度の協力もあり、互助もあるのは云ふ迄もないが、何と云つても、それは異事的協力、つまり各自が別々に各自の道を進むと云ふ形式になるので、單にその方の力量があるだけでは、吾々は、十分力強く運命や社會の威力と戦ふことは出来ない。君が、職業技術だけでは不安だ、と云つたのも、其の點が心配なんだらう。

青年 さうです。

主人 そこで所謂同事的協力、即ち、公の事に協力する力量が必要になつて来る。例へば、學校を建てたり、橋をかけたり、衛生設備をしたり、秩序を維持したり、或は法律制度や、經濟機構や、社會組織の改善を計つたりすることに、協力の能力がないとすると、各人の職業技術はどんなに立派であつても、世の中は決して善くならないし、何時、何處から、どんな不幸が不意に襲つて来るかも知れないので、吾々は常に不安の中に居なければならぬ。これは全く解り切つた事なんだ。ところが、職業上の力量を養ふことには努力しても、この方の力量を養

ふことには無關心で居る人が、非常に多いのは残念だ。

青年 日本の政治腐敗の原因も、たしかにそこにあるやうですね。

主人 全くだ。日本人は、元來、職業上の力量に於ては、白人なんかに劣るものでないが、公共の事になると、まだ、前途遠遠の感があるね。五倫の道徳で養はれて来たためかも知れないが、直接関係のある人のためには、随分立派な行動をするに拘らず、廣い社會と云ふものに對する道徳は、から駄目だ。

青年 選挙の腐敗、議會の墮落、そしてその結果が、社會不安、農村疲弊、失業、ルンペン、暗殺、暴動、運命觀、自殺——成るほど、考へて見ますと……

主人 さう何もかも、政治にばかり責を歸するわけにも行かないが、大半の責任はたしかに政治にあるね。

青年 郷土生活や地方自治も、黨弊のために、この頃ではめちやめちやなやうですね。

主人 それと云ふのも、全く國民に「公」に對する眞の理解がなく、正しい意味の協力をやる力量がないからだ。もしその方の力量さへ出来れば、君が恐れて居る運命とか、社會とか云ふものゝ威力も、大半は無くなると思ふね。

青年 一般國民の自覺は無論必要でせうが、政治家の方も、少しは反省して貰ひたいと思ひますね。國民を墮落させて居るのは彼等なんですから。

主人 そりや云ふ迄もないさ。しかし他力本願では、いつまで経つたつて、善くは成らんよ。代議士なんか、商品と同じで、買手の眼さへ高くなれば、粗製品は市場から姿を消すだらう。元來、「彼等に墮落させられる。」なんて考へるのが間違ひだ。こちらが墮落さへしなければ、墮落しないで済むんだらう。そこが人間精神の自由なところぢやないかね。

青年 さう云へば、さうですが……

主人 さう云ふより外に云ひやうがないね。運命や社會の威力を恐れる前に、先づ自己の正義觀の曇れるを恐れ、自己の意志の弱きを恥づるのが順序だらう。自分のやるべきことはやらないで置いて、天を怨み、世を咀つて、自暴自棄になつたり、破壊的行動に出たりするのは、人間として恥づべきことだ。殊に、今日の立憲政治組織の下に於ては、國民が良心的であり、正しく公事を運用する力量さへあれば、社會悲劇の大部分は征服が出来るし、また所謂運命悲劇と云ふものゝ範圍も、ずつと縮小されるだらう。

青年 よく解りました。無論僕だつて、職業だけでなく、さう云ふ方面にも、相當に努力して居

るつもりです。しかし、何しろ一人だけの力では、どうにもなりませんね。

主人 さう云ふ考へ方が、第一、いけないんだ。みんなが、一人では駄目だ、と思つて居たら、いつまで経つたつて、駄目ぢやないか。結束して立てれば、それに越したことはないさ。しかしそれが出来なければ、一人で立つんだね。善の力が一つ殖えると、世の中は、それだけいゝ方に向いて行くにきまつて居る。しかも、「徳は孤ならず必ず隣有り。」で、一人が立上ると、あとからあとからと、同志は出来るものだ。恰度、海鼠を食ふ人が一人出来ると、みんなが安心して、それを食ふやうなものでね。しかし、最初に海鼠を食つた人間は、餘程剛膽だつたらうと思ふ。

青年 なるほど。僕もこれから、その剛膽な一人になるつもりで、しつかりやつて見ませう。
主人 どうか、さうあつて欲しものだね。

七、人間愛に對する信

青年 ところで先生、職業技術や公事能力を養つて、運命の迫害や、社會の缺陷の大部分を、征服することが出来るとしましても、それは遠い將來のことで、今すぐと云ふわけには行かない

と思ひますが……。

主人 それは無論さうさ。

青年 すると、現在どんなに良心的に努力しても、運命や社會組織から來る惨害を、多少とも受けないわけには行きませんね。

主人 それはやむを得ない。

青年 先生のやうに、やむを得ないと云つて、平氣で居られれば結構ですが、僕達にはそれが出來ないので。それで、さうした場合の心の持方ですが……

主人 つまり、君の言ふのは、さう云ふ惨害に出逢つた場合、どうしたら絶望しないで居られるか、と云ふんだらう。

青年 さうです。明かに自分の怠慢のために招いた惨害なら、又、自分の努力で取りかへさう、と云ふ氣にも成りませうが、全力をつくして、正しい生き方をして居ながら、所謂運命に翻弄されたり、社會から無法に虐げられたりしたら、再び自力で立たうと云ふ氣力を失つて、噴火口に飛び込んだり、破壊的行動に出たりするのも、やむを得ないんぢやありませんまいか。それも力量の不足だと云つて、済ましてばかりは居られないやうな氣がしますが……。

主人 尤もだ。さう云ふ人に、あく迄も自力で立てと云ふのは、一寸忍びないところもあるね。しかし、自殺したり、破壊的行動に出たりすることまでも、是認するわけには行かない。さう成るまでには、まだ道がある筈だ。

青年 それはどう云ふ道でせう。

主人 愛の力を信ずることさ。社會の組織はどんなに悪くても、一人一人の胸には、天が與へた愛の乳房が、まだ滴つて居る。少くとも、世界の何處かには、さう云ふ乳房を持つた人間が居る。それを信ずることだ。そのうちには、屹度何處からか愛の手がやつて来る。そして、それによつて、再び自分の力を蘇らすことが出来るだらう。無論、自信を失ふのは、いゝことではない。しかし、自信を失つたら、自暴になる前に、先づ愛の力を待ちのぞむべきだ。それは決して恥づべきことではない。そのためにこそ、吾々は家庭を作り、社會を作つて居るんだ。むしろ、さうした場合、世の中に顔をそむけることこそ、人間として恥づべきだと思ふね。世の中には、逆境には打克つたが、心は冷たくなつてしまつた、と云ふやうな人がよくあるが、それは人間としての眞の勝利者ではない。それこそまさしく敗北者だ。勝つたつもりで、その實負けて居る。と云ふのは、その人の心から、「人間」が失はれて居るからなんだ。むしろ私

は、逆境にひしがれても、愛を信ずる心を失はない人の方が、人間らしくていゝと思ふね。

青年 先生の自力主義も、どうやら、少しあやしくなつて來ましたね。

主人 いや、私の自力主義に變りはない。だが、私の自力主義は、正義と愛の世界を建設したいための自力主義なんだ。愛を失つては、自力主義は意味を成さない。私が、心の冷え切つた強者よりも、愛を待ちのぞむ弱者に與するの、そのためだ。

青年 なるほど。ところで、先生、人間の愛の力を信ずるだけで、本當に心の落ちつきが出来るものでせうか。待つても、待つても、人間の愛の手が下つて來ないと云ふ場合も、随分あると思ひますが……。

八、神と共にある心

主人 それは、たしかに無いとは云へないね。基督が十字架にのぼつたやうな場合のことを考へて見ると、人間を相手にして居たのでは、どうにも成らないからね。

青年 さう云ふ時こそ、何か人間以上の大きなものに、すがりたくなるんではないでせうか。

主人 私は、宗教についてあまり云ふ資格を持たないが、もし神の愛、佛の愛、宇宙大生命の愛

と云ふやうなものに、自分が抱かれて居る、と確信するやうになれば、それこそ、人間としての本當の力量が出来たと云へるだらう。さうなつたら、如何なる場合にも不安は無からうし、また、決して人間としての行動を誤ることもあるまい。

青年 先生は、宇宙力のお話の時に、「神は人間の造主でなくて、却つて人間が神の造主だ。」と云はれましたが、さうすると、神の愛に抱かれると云ふのは、どう云ふ意味になりませうか。

主人 それは、簡単に云ふと、無限の理想に抱かれる、と云ふことなんだ。これは、私一個の考かも知れないが、神とか、佛とか云ふのは、人間が抱きうる最高の理想を、實在化したものだと思ふね。

青年 宇宙の大生命と云ふのも、同じなんですな。

主人 さうだ。それは物理的な宇宙力を指して云ふのでなく、吾々の無限の理想を、宇宙力に反映せしめて名づけた名なんだ。

青年 反映せしめると云ひますと？

主人 つまり、我々の理想するが如き力が、宇宙力の中に存在する、と信ずることなんだ。青年 實際、宇宙にそんな力があるものでせうか。

主人 それがないと云つてしまへば、理想は空虚なものになる。宇宙にその力がある、と確信してこそ、吾々が理想に向つて突進する意味も出て来るんだ。しかし、さう云ふ問題は、めいめいの信仰如何にあるので、議論では決めたくないと思ふね。

青年 しかし、神や、佛や、宇宙の大生命が、人間の理想の實在化されたものであるとすると、その愛に抱かれると云ふことは、自分で作つたものに自分が抱かれる、と云ふことになつて、何だか變ではありませんか。

主人 私は、ちつとも變でないと思ふ。

青年 でも、自ら立ち上る自信を失つたものが、自分の作つた理想に抱かれて、救はれると云ふのは、矛盾して居ますね。

主人 すると君は、自信を失つたものは、自分以外のものにたよるより仕方がない、と云ふのかね。

青年 それが、當りまへではありませんか。

主人 しかし、人間は、詮じつめると、自分の力で生きて居るものなんだよ。

青年 自分の力を信じなくなつても、ですか。

主人 さうだ。自信を失つて、自分以外のものにたよるにしても、その自分以外のものゝ力を信じ、それに希望をかけるのは、結局自分の力ではないかね。

青年 それにしても、自分の力を信ずることの出来ない者が、自分の作つた理想だけを信ずると云ふことは、あり得ないと思ひますが。

主人 普通に頭の中だけで考へた理想だと、さうかも知れない。しかし、理想が十分に熟して、信仰の域に達し、實在化されて来ると、それは、自分のものでありながら、自分以上の力を持つやうになり、自分の力には信が置けなくとも、その力には十分希望をかけることが出来る、と云ふやうになるものだ。そこに人間精神の靈妙な働きがある。

青年 なるほど、宗教上の信仰と云ふものは、さう云ふものでせうかね。

主人 だが、これは私一個の神についての考へだ。神の内容は、恐らく、人によつて違ふだらう。ちがつてもかまはない。それは議論で決めらるべき性質のものではないのだから、めいめいに、安心の出来るやうな信じ方をいゝと思ふね。兎に角、無限圓滿にして愛に充ち満ちたものゝ存在を信じ、常にそれと共に歩み、それと共に悦び、且つ艱むことが出来るものは、どんなに行き詰つたやうに見えても、決して本當に行詰ることはない。信仰の形式如何に

拘らず、それだけはたしかだ。

青年 すると、信仰の力が人間の最後の力だ、と云ふことになりませうか。

主人 さうだ。それが人間の最後にして最大の力量だ。私はさう信ずる。

青年 佛教などで、他力とか自力とか云ひますが、先生の御考へのやうですと、一體、どちらの方になりませうか。

主人 私は、「生命」や「人間性」の話をした時にも云つた通り、生命は本来自律的なもので、その成長は、要するに、自律性の發展だと考へて居るから、人生觀の範圍では、無論自力宗だ。しかし、宗教的信仰と云ふことになると、自力と云つた方がいゝか、他力と云つた方がいゝか、解らないね。

青年 それは、どう云ふわけです。

主人 神は自分の理想の實在化されたものであり、且つこれを信ずる力も自分のものである、と考へると自力だが、自分の描いた理想であつても、それがすでに自分以上の存在であり、しかも、それを信ずる力も、亦、それに恵まれたものだと思つると、他力になる。

青年 なるほど。

主人 元來、自力とか他方とかは、まだ自分と神とを、區別して考へて居る場合に、云へることで、自分と神とが一體になつた境地では、自力も他力もないわけだ。そこまで進むと、神の力は自分の力、自分の力は神の力、と云ふわけになるから、自信を失ふとか、神の愛にすぎるとか云ふやうなことは、全く問題でなくなるだらう。それこそ眞に大量の人で、どんな苦難に逢つても、智慧と勇氣が滾々と湧いて来て、自由無礙に振舞ふことが出来るんだと思ふね。

青年 さう云ふ人が、先生の所謂宇宙我を養ひ得た人なんですね。

主人 さうだ。宇宙即我、我即宇宙、宇宙と我とは、さうなると、別々のものではない。

青年 すると、他力宗とか、自力宗とか、銘打つて居る間は、まだ本物ではないわけですね。

主人 一概に本物でないとは云へない。一體、宗旨と云ふものは、修行の態度を示したもので、究極の境地を示したものではない。だから、單にそれだけで、本物であるとか、さうで無いとかを、決めるわけには行かない。同じく他力宗を標榜して居ても、法然や親鸞は本物だつたらうと思はれるし、この頃の坊さん達の中には、随分あやしいのが居るやうだからね。

青年 なるほど、宗旨を修行の態度だと考へると、必ずしも、一宗一派に捉はれる必要がありませんね。

主人 宗旨から宗旨へと、あまり浮氣に飛びまはるのも考へものだが、一つの宗旨に捉はれてはいけない。況んや排他的根性をやだ。古來の偉大な宗教家達は、いづれも吾々に眞理の明月を指して呉れて居るが、吾々は、どうかすると、その明月を見ないで、指だけを見て居る。そして指を眞理だと思ひがちして居る。そこで宗派のいがみ合が始まるんだ。さうなると、宗教も人間を救ふのでなくて、却つて人間を地獄に蹴落すことになるね。吾々の生活態度に不動の基礎を與へるための信仰は、決して、そんなものであつては成らないのだ。

青年 僕達としては、どう云ふ筋道をとつて、宗教に這入つたらいいものでせうか。

主人 さうだね。佛教なり、基督教なりに、すでに何かの信仰を持つて居れば、その方を深めて行く方がいゝだらうと思ふが、もし、さうでなければ、先づ、偉大な宗教家達の傳記や、言行録などに親しんで見ることだね。そのうちには、自然と、君自身の方向がきまつて来るだらう。

青年 有りがたうございました。今夜は随分晩くなりましたが、序に、もう一つお尋ねしたいことがあるんですが……

九、懺悔奉仕の心

主人 やはり宗教に關したことかね。

青年 宗教に深い關係があることと思ひます。それは懺悔奉仕とか、懺悔の生活とか云ふことの意味なんです。

主人 うむ。實は、私もそれについては、一寸でも話して置きたい、と思つて居たところだ。前に云つた通り、吾々の生活態度をきめる根本の觀念は、生命力の表現による人生創造にあるんだが、それは職業奉仕と公事奉仕によつて、大體成し遂げられる。そして、眞にそれに磨きをかけるものが、懺悔奉仕なんだ。懺悔奉仕と云つても、實際にやる事柄が、職業奉仕や公事奉仕と、根本的にちがつて居ると云ふわけのものではない。それは罪の自覺と、それに伴ふ懺悔の心をもつて、すべての事に當らうと云ふ、心の態度なんだ。

青年 罪の自覺と申しますと？

主人 罪と云ふと恐ろしく聞えるかも知れんが、つまり、自己の不完全を十分に意識して、許されて生きる、と云ふ心持になり、その心持を持ち續けて、社會人生に對しようと思ふのだ。

青年 なるほど。さうすると、權利とか義務とか云ふ觀念からは、無論離れて居るわけですね。

主人 凡そ、さうした觀念とは、最も縁の遠い生活態度だらう。

青年 さうした態度の人には、正義なんて云ふ觀念もないんじゃないでせうか。

主人 普通の人が考へるやうな風には、考へて居ないかも知れない。しかし、それが無いとは云へないと思ふ。却つて、普通人よりは深いものがあるんじゃないか。

青年 深いと云ひますと？

主人 吾々は、普通、愛と正義と云ふ風に、感情的方面と理性的方面とを分けて考へて居るが、懺悔奉仕の生活態度をとりうる人にとつては、恐らく、それは別々のものでは無いだらう。更に進んで云ふと、自分が人を愛し得ると云ふやうな考は、非常に傲慢な考で、自分は常に恵まれてばかり居る、と考へて居るのではないか。そして、さう云ふ心を持つことこそ、その人達にとつては、宇宙の心、——もし正義と云ふ言葉を使へば、正義——に叶ふものだと思つて居るだらう。

青年 恐ろしく他力宗のやうに思はれますね。

主人 私に云はせると、非常に自力的だと思ふね。少しの貪るところもなく、普通に考へて當然

自分のものであるものをも、恵まれたものだと思へるやうな心境は、なまやさしい努力で、達せられるものではないよ。

青年 なるほど。しかし人生に對する態度は、随分消極的ではありませんか。人の家の便所の掃除ばかりして、残飯を食つて生きて居るやうな生活は、どうも感心出来ませんね。

主人 たしかに、その嫌はあるやうだ。しかし、修行の道程として、あゝした下座行をやるのも、必要だと思ふね。

青年 修行としてならいゝでせうが、中には、それが生活の全部であり、それ以外に高貴な生活はない、と考へて居る者もあるやうです。

主人 さうなると、たしかに邪道だ。

青年 一體、「許されて生きる」なんて云ふ考は、必然的に、そんな結果になるものではないでせうか。

主人 さうは考へられない。眞にその考を生かして行けば、非常に積極的な生活態度になるだらうと思ふね。

青年 それが、僕にはどうも解りません。

主人 人間は不完全である。不完全であるから絶えず罪を犯す。そして、その罪は永遠に消えない。それは大海に落とした朱の一滴のやうに、明らかには見えないが、何處かに漂うて居る。十滴、百滴、萬滴、億萬滴とたらし行くうちに、海はだん／＼と朱に染まるであらう。吾々の社會も、かうして常に濁つて行く。しかし、不完全なる吾々にも、一つの尊いものが與へられて居る。それは理想を追求し、神を求むる心である。吾々は罪を消すことは出来ないが、この神を求め、理想を追求する心によつて、よきものを生み出し、それを世に捧げて、罪の償ひをすることが出来る。善の力を惡の力に打勝たせ、それによつて、社會の汚濁を洗ひ落すことが出来る。そのために吾々は、政治、教育、藝術、經濟、その他生活のあらゆる部門に於て、自己の持場を、極限まで生かして行かなければならない。しかも、吾々はその成果に誇つてはならない。吾々は、常に、許されて生きる心を堅持しなければならぬ。それは、吾々は不完全であり、常に罪を犯すであらうから。——と、かう考へたら、積極的にならざるを得ないではないかね。

青年 なるほど。すると懺悔奉仕と云ふのは、職業奉仕や、公事奉仕をやる場合の、心の持ち方であつて、別に、便所掃除と云つたやうな、特殊な奉仕の方面がある、と云ふわけではありま

せんね。

主人 無論さうさ。つまり懺悔奉仕の心は、職業奉仕や公事奉仕に、うるほひと力とを與へるものだ。しかし、さう云ふ心になるのにも、相當の修行がある。君がしきりに氣にして居る便所掃除なんか、その意味から云ふと、非常に深い意味があるんだ。君も、一つ、仕事の合間合間に、やつて見てはどうかね。いゝ修養になるぜ。不平や不満を抑へるには、實に妙薬だと思ふね。

青年 なるほど。是非一つやつて見ませう。

主人 懺悔奉仕について、もう一つ云つて置きたい事は、この心が深まつて來ると、必ず強い宗教的色彩を帯びて來ると云ふことだ。云ふまでもなく、偉大な宗教家達は、皆この心に徹した人達なんだ。彼等は何者をも怨まない。怨まないばかりか、人類の僕となつて、世界中の重荷を負うて歩いたんだ。そして、かう云ふ人達によつて、世界は時々大飛躍をやる。普通の職業奉仕や公事奉仕が、眞面目に行はれて居れば、大體世界は順調に進んで行く筈のものだが、ともすると、生命の滓がたまつて、折々暗い時代が世界を襲つて來る。その時に、世界を揺り動かして、大飛躍をなさしめる者は、いつも懺悔奉仕の心に徹した人達だ。これは個人の場合で

も同じで、人間の魂は、懺悔の心なしに、滅多に飛躍するものではない。親鸞が、「善人なほもて往生す、いかに況んや悪人をや。」と云つたのもこの事で、こゝに悪人と云ふのは、罪を自覺して、懺悔の心を抱いて居る人を指すんだ。

青年 だんく承つて居ますと、無限の理想を逐ふ心と、懺悔奉仕に徹する心とは、結局同じことのやうに思へますが、如何でせうか。

主人 いゝところに氣がついた。全く君の云ふ通りだ。その事をルーテルは「信仰とは、悔い改めの連続なり。」と云つて居る。君もそこまで解れば、もうあとは實際の修行一つだ。精々事上錬磨で行くことだね。

一〇、事上錬磨と事上表現

青年 その修行がなかなかです。何しろ、毎日仕事にばかり逐はれて居ますので。

主人 おいゝ、それでは君は、まだ何も解つて居ないぢやないか。

青年 はあ……。

主人 はあぢやないよ。事上錬磨と云ふのは、毎日の仕事の中で、事々物々に因縁を生かして行

くことなんぢやないか。そりや、坐禪ざぜんをしたり、禮拜らいはいをしたりするの、修行には相違ない。出来れば、そんなこともやるに越したことはないさ。しかし、本當に身につく修行、しかも、生活と修養とを切り離さない修行は、君自身の實生活の中にあるんだ。

青年 なるほど、さうでした。そのことは、よく解つたつもりで居ましたが。

主人 やはり、話だけでは實にならないと見えて、尻ばを出すね。かうなると、益々以て、事上鍊磨の必要がある。

青年 これから、屹度きつとしつかりやります。

主人 君は事上鍊磨と云ふことを、特別な修養だ、とばかり考へて居るから、うっかり先刻のやうな事を云ひ出すやうになる。事上鍊磨は事上表現、云ひかへると、それが實生活なんだ。職業や公事に、正しく自己の生命力を表現しようと努めるのが、とりも直さず事上鍊磨であり、そしてそれこそ本當の實生活であり、それ以外には、正しい意味での人間の生活はない筈だ。念々生活、念々修道、これが本當の意味での事上鍊磨なんだ。解つたかね。

青年 今度こそは、本當に解りました。そのつもりで、大いにこれから奮闘します。

主人 ところで、もう何時かね。

青年 もうすぐ十二時です。

主人 今夜は随分ずいぶん晩くまで話したなあ。では、この位にして寝ようかね。

青年 すると、明晩あやうばんはどんなお話が伺へませうか。

主人 さうく、實は私は明日から暫く旅行をする豫定なんだがね。

青年 さうでせうか。まだ國家とか、社會とか、色々さう云ふ問題について、承りたい事があるんですが……。

主人 それは、今度歸つてから、ゆつくり話すことにしよう。人生に關する基礎的な話も、不完全ながら、今夜で一先づ、まとまりがついたやうだし、當分休むことにしようぢやないか。

青年 では、又そのうちお願いいたします。今夜は晩くまで、大變お邪魔しました。では、おやすみ下さい。

主人 當分逢へないと思ふが、しつかりやり給へ。

青年 有りがたうございます。御蔭で、以前よりはずつと気分も落ちついたやうですから、精々働きます。先生も、御旅行中、御氣をおつけ下さい。

主人 ありがたう。ではおやすみ。

〔摘要〕

- 一、生存、所有、表現、これが人間の生活態度を決する三つの要因である。而して、單に生存せんがために所有し表現する生活は、未だ動物的生活の範圍を出でざる生活である。又所有せんがために生存し表現する生活は、目的と手段とを轉倒せる生活で、それは正しき生活ではない。眞に正しき生活は、自己の生命力の表現を目標とし、そのためにのみ生存し、且つ所有するのではなくては成らぬ。
- 二、財物は、生命力表現に役立つ限りに於て、價値を有する。人は常に物の主と成つて、これを生かさなければならぬ。決して物に驅使せられては成らぬ。
- 三、職業は單に生活費を獲得するための手段ではない。それは生存の手段であると共に、生命力表現の手段である。職業を通じて、各人がその生命力を表現し、相互に奉仕するところに、人類文化の進歩がある。
- 四、各自の生存を安固ならしめるためにも、生命力を完全に表現するためにも、職業技術は十分に錬磨されなければならぬ。職業技術の優秀は、人間をして強者たらしめる。運命及社會の威力は屢々人間を劫かすが、職業技術の優秀は、ある程度まで、これに打克つことが出来るであらう。
- 五、職業技術を錬磨すると共に、公共の事に協力する能力が十分に養はれなければならぬ。立憲治下に於ては、この能力が十分であれば、社會の不正義は、概ねこれを除去することが出来、又ある程度まで、

- 所謂運命と稱するものゝ威力をも、縮少することが出来るであらう。
- 六、人間相互の愛に對する信は、絶對に失つては成らない。かりに全く自信を失ひ、自ら立つ能はざる場合に陥つても、尙吾々は、人間相互の愛に希望をつなぐべきである。それは決して敗北を意味しない。自力を以て困難に打克つことが出来ても、人生に顔を背ける者こそ、却つて敗者である。それは、その人の胸から、人間が失はれて居るからである。
 - 七、宇宙の大生命と一體になり、これと共に喜び、且つ艱む心こそ、大力量の源である。かくの如き宗教的信仰は、もはや自力他力の區別を超越して居る。宇宙即我、我即宇宙、宇宙の力は我の力であり、我の力は宇宙の力である。茲に一切の不安は消滅する。
 - 八、懺悔奉仕の心は、職業奉仕と公事奉仕とに光と力を與へ、眞にこれを完成するものである。それは決して消極的な生活態度ではない。それは、深く自己の不完全と罪とを自覺し、大勇猛心を起して理想を追求する態度なるが故に、生活のあらゆる部門に於て、自己の持場を極限まで生かすものである。社會も個人も、この心によつて屢々大なる飛躍をなすことが出来る。
 - 九、事上錬磨は、事上に自己の生命力を表現することである。眞の修養は實生活の中にあり、眞の生活は念々修道の心を以てするところに營まれる。修養と生活とは決して別々のものではない。

不許複製

昭和十五年五月二日印刷
昭和十五年五月四日發行

人生を語る

定價金一圓五十錢

外地定價一圓六十五錢

著者 下村虎六郎

發行者 東京市神田區神保町一ノ五〇
合資會社泰文館代表者
伊藤巳之助

印刷者 東京市小石川區指ヶ谷町四番地
米島常次郎

發兌所 東京市神田區神保町一ノ五〇
合資會社泰文館

電話神田四四九六番
番號東京六七六〇三番

弊店發行の書籍は地方いづれの書店でも特約販賣致して居ますが萬一品切の場合は直接本社へ御申越願ますれば急送致します。
尙圖書目錄及振替用紙御入用の方は御申越次第直に御送り致します。

文省堂印刷所印行

泰文館發行圖書目錄拔萃

圖書目錄御申越次第進呈

下村虎六郎先生著

人生を語る

圖書館協會・大日本青年團推薦
司法省 大量御買上

四六判クローズ
上製函入美本
定價一圓五十錢
送料十錢

本書は司法省より、思想教本に選ばれ、數百部御買上の光榮を得た。全篇興味深い對話で、而も整然と大系が組織されて、宇宙を、生命を、人間を生活態度を、論じ盡してあるので、脚本でも讀むで居るやうな氣安さのうちに、重大な人生の深奥の問題を會得することが出来る。

前臺北高等學校長 下村虎六郎先生著
大日本青年團講習所長

教育的反省

大日本青年團推薦・海軍省大量御買上

四六判クローズ
上製函入美本
定價一圓五十錢
送料十錢

「人生を語る」の姉妹篇、之れは海軍省より、數百部御買上の光榮に浴した。著者の言葉に、「人生を語る」は、自分の人生觀の經であり、本書はその緯である。誠に著者二十數年間の教育生活に於ける、深沈にして明朗なる感懷を綴つた輝く入生教本である。

下村虎六郎先生著

眞理に生きる

大日本青年團推薦

四六判クローズ
上製函入美本
定價一圓五十錢
送料十錢

「人生を語る」「教育的反省」の二名著に續いて著者の珠玉の人生説話を集録したもので、一々の説法は常に興味深い例話に始まり、著者の一貫した人生觀の下に纏められてあり、終りには自作の短歌が十首位宛挿入されて居る。著者の歌壇に於ける地位はすでに定評のあるところ、香り高い好篇である。

前臺北高等學校長 下村虎六郎先生著
大日本青年團講習所長

魂は歩む

茗溪會・大日本青年團推薦

好評再版

四六判クローズ
上製頗美本
定價金九十錢
送料十錢

「自己」に悩み、「結婚」に悩んだ、一農村青年の血みどろな苦闘！そして、苦闘の後、創作の形をとつて、藝術の香り高く、著者の深刻な心理洞察と高遠な人生觀を盛る。俗悪な大衆小説の氾濫の中に、一粒の眞珠と燦く、至純高雅な人生の書である。

帆船芳之助先生著 好評六版

貧乏を征服した人々

四六判クロス
上製函入美本
定價一圓五十錢
送料十四錢

本書は我國一流の政治家、軍人、實業家、農家、學者、思想家、藝術家等、約三十名を拉して、其の貧乏時代、窮迫時代の事情を著し、此等の人々が如何にして、貧苦に打ち勝ち、窮境を脱して、人生の勝利者となつたかを綴つて集大成したものである。小説よりも奇にして、何人をも感奮せしめねばやまぬ。

小瀧 淳先生著 好評三版

人生の活路

四六判クロス
上製函入美本
定價一圓五十錢
送料十四錢

本書は、日常生活に宗教を味ひ、人生を讚美する著者の信念の下に、社會の出來事に構想した短篇小説を創作し、讀者が興味中心に讀み過すうち、佛陀の訓誨をおのづから、我物にすることが出来ると言ふ創意になつた短篇小説集である。

澤田 謙先生著

凡人非凡人

四六判クロス
上製函入美本
定價一圓五十錢
送料十四錢

君よ、憐れ、世の中の下積みとなり給ふな！ 村でも、町でも、少しでも非凡になることが、人間の生き甲斐だ。それには、腹が要る、道がある。本書に依つて、それを知れ！ 古今東西の英雄、偉人、達人を紙上に躍動させ、其の眞髓を寫す。

寺島隆太郎先生著

佛教反省時代

四六判クロス
上製函入美本
定價一圓三十錢
送料十錢

鷗澤總明博士序文に曰く「著者は熱烈であり、親切であり、而して心の奥底に、何物か信念の響きがある如く感じられる。佛教反省時代とは、實に大問題であらねばならぬ。這箇青年氣鋭學徒の觀察、果して摺む所、如何。冀くば、能く善を揚げて、美を盡さんことを」

小笠原流 禮法師範

小平久馬先生著 好評五版

日本婚禮式

附一一般禮式、性の教育、九星の相性

菊版クロス
上製函入美本
定價一圓八十錢
送料十四錢

現下の重大時局に際して、日本精神が高揚され、古來の美風が一層尊重され、歐米の輕兆な惡風は地を拂はれやうとして居る。本書は、我國禮法の泰斗たる著者が、正しい禮法を國民に知らしめるため、貴賤上下を通じて婦人の行ひ守るべき禮式を示されたもので、人生の最大事婚禮式を主として、日常一般の禮法をも、細大漏らさず、何人も納得するやう、懇切丁寧に解説されて居る。

昇龍齋專之先生著

好評五版

池の坊流花の生け方

附一盛花と投入花

菊版上製
函入美本
定價一圓七十錢
送料十四錢

一つの水盤の中に、一つの瓶の中に、春蘭な野邊の景色を、又は、涼風自ら起る池畔の面影を、或は紅葉鮮やかな秋の山邊を、そのまゝに移して眺めることが出来るとしたなら、生業に追はれて忙しく毎日を送り、又、薨を並べ立つ街並に明け暮れを過す人々の心が、どんなに慰められ、豊になり、活氣づけられることせうか。本書は氣品高い池の坊の生花、盛花、投入花をやさしく教へたものであります。

帝國美術院會員
明長派陰陽研究會長

荒木十畝畫伯口繪
戸田景明先生著

萬戸必備 家相眞法

運命開拓の一大福音書

菊版上製函入美本
口繪挿畫約百個
定價金二圓
送料十四錢

前篇に於て地相、中篇に家相、後篇には六十箇の挿畫を以つて、家相法の全般を平明に解説し、附録(漫談)には、最近の中等家事教科書及各雜誌に掲載された、文化住宅圖等を採録して、忌憚なく吉凶反應の説明を加へ、尙、神社、佛閣、學校、會社、工場、ビルディング、旅館、寄宿舎、借家、市街地、農村の家相等、廣汎に亘り、實例を擧げ素人は眞の家相法を知り、玄人に無二の好參考書

著者名	書名	定價	送料	著者名	書名	定價	送料
山崎延吉	山村全村學	二、五〇	一四	増田亮一	農村更生の秘訣	一、六〇	一四
山崎延吉	農村道説	二、〇〇	一四	増田亮一	興村活話	一、五〇	一四
山崎延吉	世に立つ	一、五〇	一四	富田亮一	銃後農民革新の書	一、五〇	一四
山崎延吉	生民の活	一、五〇	一四	富田亮一	戦時農村對策と戦後の經營	二、〇〇	一四
山崎延吉	村家民	一、五〇	一四	秀島寅治郎	農民の歩みたき道	一、〇〇	一四
山崎延吉	若き人の	一、五〇	一四	菅原龜五郎	日本一の百姓 農家經營	一、三〇	一四
山崎延吉	親愛なる青年へ	一、〇〇	一四	松本健良	農村社會學	一、五〇	一四
山路虎吉	篤農家の研究	三、〇〇	一四	古瀬傳藏	優良農村の經營	一、五〇	一四
谷本龜次郎	理想農村の建設	二、五〇	一四	小西徳治郎	農民への大號令	一、八〇	一四
谷本龜次郎	農村文化の建設	二、五〇	一四	石田傳吉	農村更生の要諦	一、五〇	一四
谷本龜次郎	合理的農家經營實際	一、八〇	一四	石田傳吉	農村問題解決の神髓	一、八〇	一四
谷本龜次郎	農家を富ます道	一、五〇	一四	白神正吉	農村更生講話	一、六〇	一四
折目六右衛門	農村更生指導の實際	一、五〇	一四	大杉房吉	地方青年の覺醒	一、五〇	一四
香月秀雄	農事組合講話	一、六〇	一四	岩谷愛石	農村振興根本方策	一、五〇	一四
香月秀雄	日本精神に基く優秀村建設	二、〇〇	一四	岩谷愛石	農村の生かす道	一、三〇	一四

著者名	書名	定價	送料	著者名	書名	定價	送料
村田宇一郎	農村の更生を語る	一、五〇	一四	農業經濟研究	農業動産信用法解説	二、九〇	一四
中原菊次郎	青年に呼びかく	一、〇〇	一四	植村義一郎	託兒所經營の理論實際	二、〇〇	一四
熊谷辰治郎	郷土に輝く人々	一、三〇	一四	高橋廣治	高橋實験養鶏法	三、八〇	一三
熊谷辰治郎	青年團の行くべき道	一、三〇	一四	高橋廣治	養鶏難問五百題	一、五〇	一〇
竹原貞治	農業認識と更生の道	一、三〇	一四	高橋廣治	養鶏の飼ひ方加工法	一、五〇	一〇
相原三郎	自力更生と農村救済案	一、三〇	一四	衣川義雄	羊の飼ひ方	一、五〇	一四
田村浩	農村更生の道	一、三〇	一四	馬俊雄	家畜の飼ひ方	一、五〇	一四
田村浩	農村共産體の研究	一、三〇	一四	帝國副業獎勵	アンゴラ兔の飼ひ方	一、三〇	一四
上塚司	農村の更生	一、〇〇	一四	深澤正策	アンゴラ兔の飼育法	一、八五	一四
小瀬淳	農村の更生	一、〇〇	一四	新井徳太郎	養兔の新研究	一、三〇	一四
古谷春吉	農村の更生	一、〇〇	一四	古谷春吉	豚の飼ひ方	一、五〇	一四
吉地昌一	農村の更生	一、〇〇	一四	古谷春吉	狸の飼ひ方	一、五〇	一四
江坂佐太郎	農村の更生	一、〇〇	一四	古谷春吉	鱈の飼ひ方	一、五〇	一四
江坂佐太郎	農村の更生	一、〇〇	一四	米野與七郎	養と七面鳥の飼ひ方	一、三〇	一四
美並東	農村の更生	一、〇〇	一四	谷本保夫	養と七面鳥の飼ひ方	一、三〇	一四
石坂橋樹	農村の更生	一、〇〇	一四	谷本保夫	養と七面鳥の飼ひ方	一、三〇	一四
長野拓郎	農村の更生	一、〇〇	一四	高橋廣治	開放新屋内養鶏法	一、〇〇	一四
長野拓郎	農村の更生	一、〇〇	一四	高橋廣治	人工孵養鶏經營法	一、五〇	一四
園司安正	農村の更生	一、〇〇	一四	高橋廣治	採卵養鶏經營法	一、五〇	一四
農業經濟研究	農村の更生	一、〇〇	一四	高橋廣治	母鶏孵養育雛法	一、五〇	一四

終